資料2
科学技術・学術審議会　学術分科会
人文学・社会科学特別委員会（第12回）
令和４年6月28日

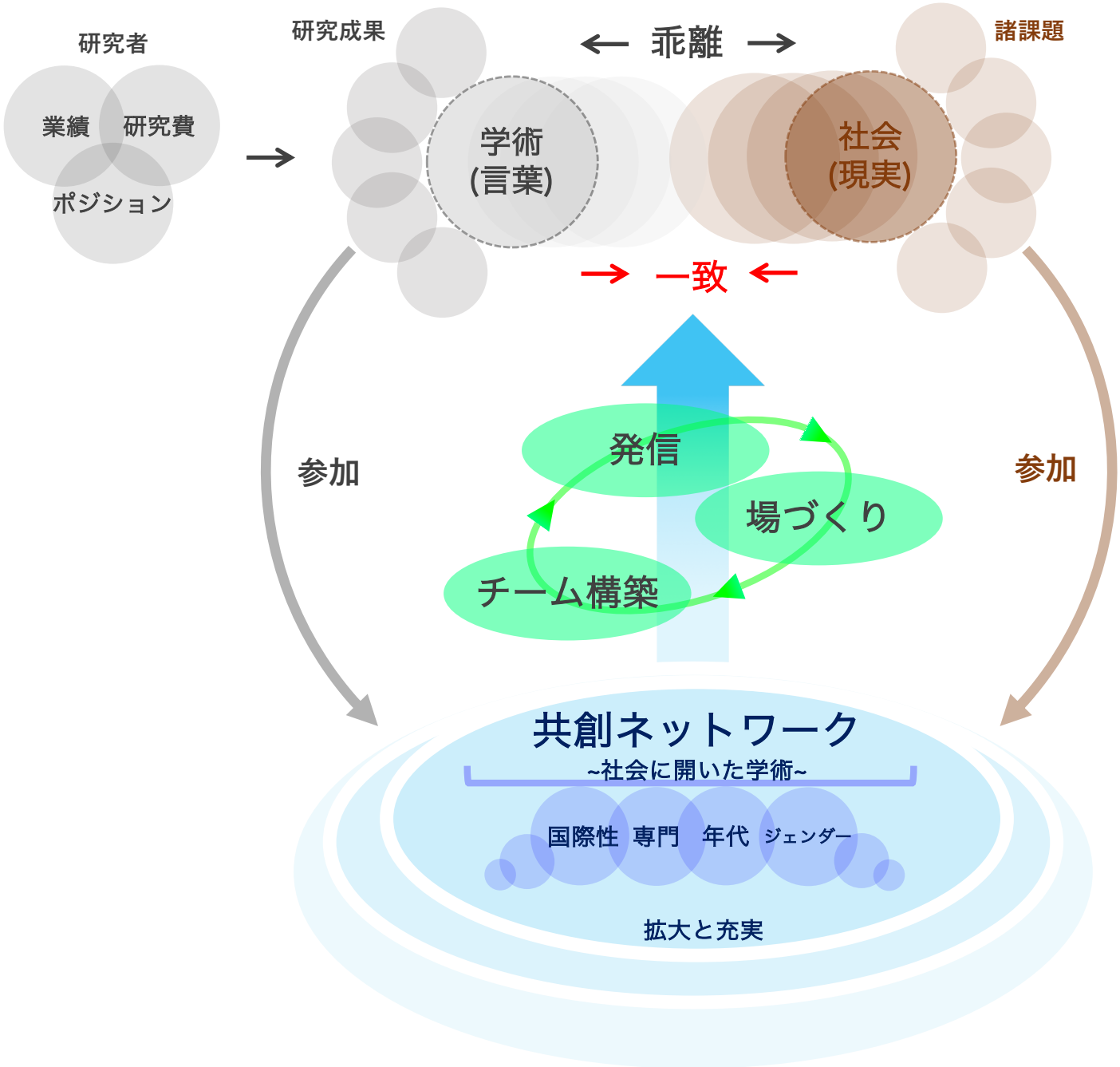
文科科学省特別委員会

『人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト』の実施状況について

2022年6月28日

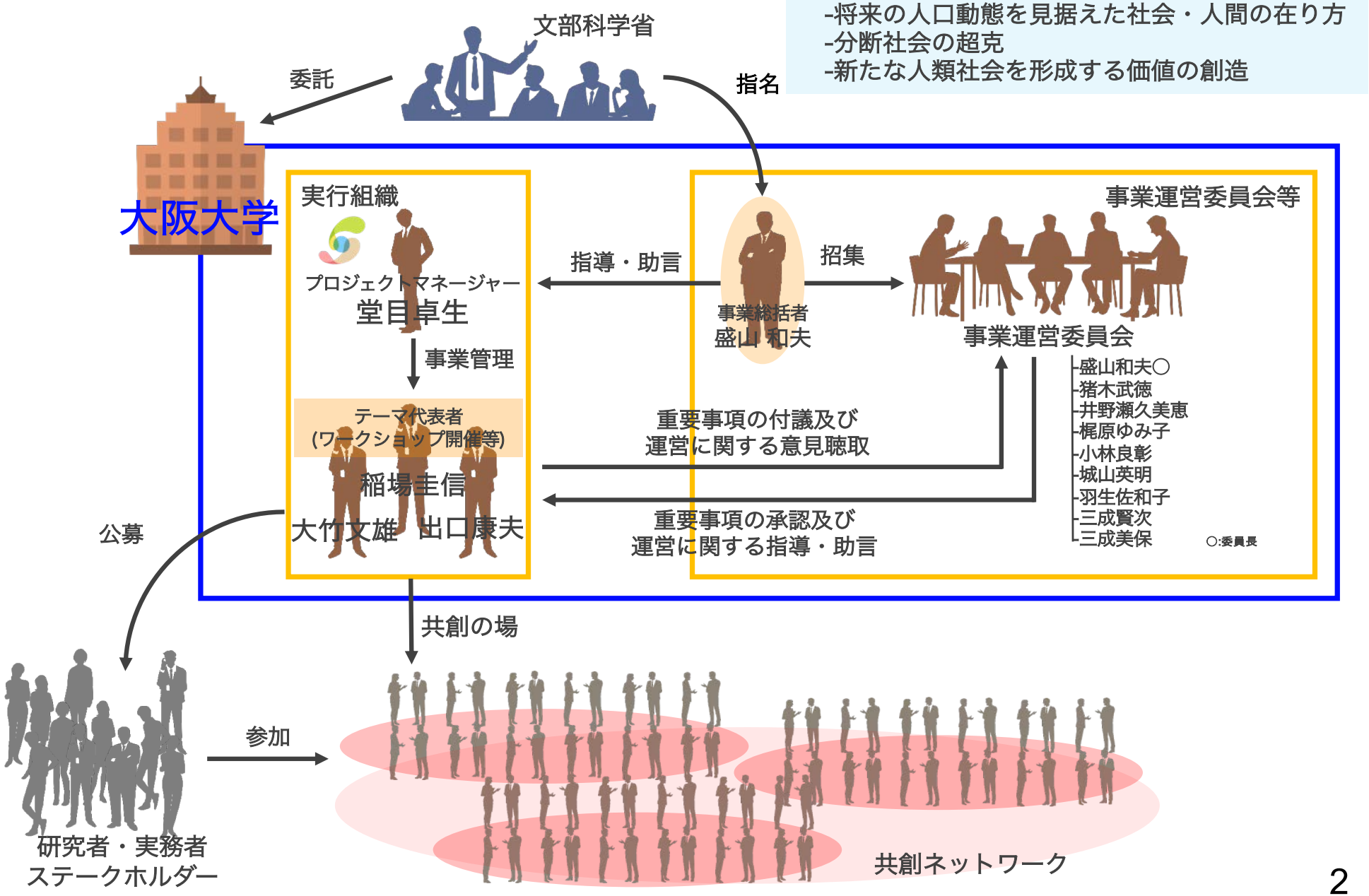
大阪大学社会ソリューションイニシアティブ長
堂目卓生

問題意識：学術と社会 ~乖離から一致へ~



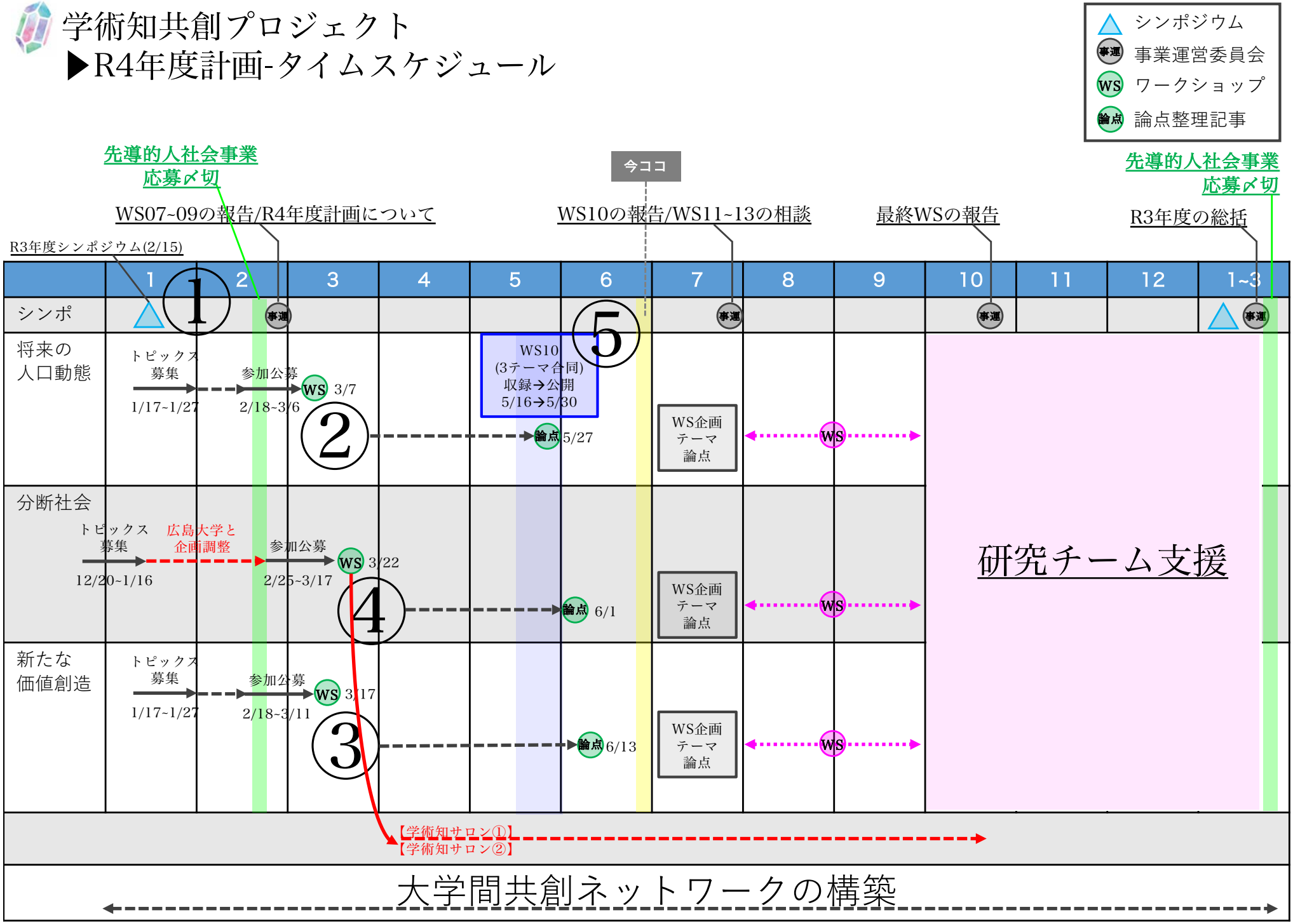
人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト -総括図

▷大きなテーマ
-将来の人口動態を見据えた社会・人間の在り方
-分断社会の超克
-新たな人類社会を形成する価値の創造



文部科学省資料一部改編

学術知共創プロジェクト
▶R4年度計画-タイムスケジュール



①シンポジウム(2/15開催)

文部科学省委託事業
人文学・社会科学を軸とした
学術知共創プロジェクト

第2回
シンポジウム

大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

未来につなぐ知 ― 公共の要としての大学

オンライン開催

2022.2.15 Tue. 15:00-18:00

日本社会もグローバル社会も様々な課題の解決に迫られる中、学術知（特に人文学・社会科学の知）と社会の間、言葉と現実との間の距離を縮め、研究成果を社会の諸課題の解決につなげるシステムを作らなくてはなりません。他方、研究者（特に若手研究者）は、研究費やポスト等の点で厳しい環境に置かれている中で、研究成果をあげなければならないという実態があります。学術と社会がより積極的な形で繋がった新しい大学の在り方を構想するために、学術界として何を為すべきか。今回のシンポジウムでは、次代を担う研究者を招き、それぞれの立場から自由に語っていただきます。

◎参加費：無料 ◎定員：500名

■ 主催：社会ソリューションイニシアティブ（SSI） ■ お問い合わせ：ak-pj@mi.office.osaka-u.ac.jp

参加申込は
こちらから
▼
クリック
https://form.run/
@gsymposium-02

社会ソリューションイニシアティブ（SSI）
SOCIAL SOLUTION INITIATIVE

プログラム

15:00	開会、各種説明	小出直史 SSI特任准教授
15:05	開会の辞	盛山和夫 事業総括者
15:10	2021年度の報告	堂目卓生 プロジェクトマネージャー
15:25	趣旨説明 論点：公共の要としての大学 システム構築における人文学・社会科学の役割 社会課題解決型の研究に対する評価の在り方	標葉隆馬 モデレーター
15:35	パネリストによる話題提供	
16:25	パネリストによる相互討論	
16:55	休憩	
17:00	質疑応答	
17:50	総括（モデレーター）	
18:00	閉会	

パネルディスカッション 登壇者プロフィール

論点 公共の要としての大学 | システム構築における人文学・社会科学の役割 社会課題解決型の研究に対する評価の在り方

◆モデレーター | 標葉 隆馬（しねは りゅうま）

大阪大学・社会技術共創研究センター 准教授

京都大学農学部応用生命科学科卒業、同大大学院生命科学研究科博士課程修了。博士（生命科学）。専門は、科学社会学・科学技術政策論。科学技術をめぐる倫理的・法的・社会的課題（ELSI）や社会の中での語られ方の研究、科学技術政策・研究評価など、複数の研究プロジェクトに取り組んでいる。著書『責任ある科学技術ガバナンス概論』（ナカニシヤ出版 2020）ほか、論文多数。

●石原 明子（いしはら あきこ）

熊本大学大学院人文社会科学研究部 准教授
テーマ：「紛争解決学に何ができるか×水俣・福島」

国際基督教大学、京都大学大学院（科哲）修了後、厚労省研究所で医療政策研究員を経て、2008年より現職。専門は紛争解決学（修復的正義、戦略的コンフリクト変容）。水俣や福島など構造的暴力の中で傷つきを抱えるコミュニティの人間関係と正義の構築、認知症やパンデミックによる社会葛藤変容にアクションリサーチにより取り組む。UC Berkeley大学院（公衆衛生）、Eastern Mennonite University大学院（紛争変容）修了。

●西田 亮介（にしだ りょうすけ）

東京工業大学リベラルアーツ研究教育院 准教授
テーマ：「大学、大学人への『不信頼』と失地の回復」

博士（政策・メディア）。慶應義塾大学総合政策学部卒業、同大学院政策・メディア研究科修士課程修了。同後期博士課程単位取得退学。（独）中小機構リサーチャー、立命館大学大学院特別招聘准教授等を経て、2015年東京工業大学着任。専門は社会学。著書に『コロナ危機の社会学』（朝日新聞出版）『メディアと自民党』（角川書店）『ネット選挙』（東洋経済新報社）ほか多数。

●福本 江利子（ふくもと えりこ）

広島大学大学院人間社会科学研究科 特任助教
テーマ：「研究と大学の公共的価値：構造、対話、志」

アリゾナ州立大学にてPh.D.（Human and Social Dimensions of Science and Technology）取得。専門は、科学技術政策、科学技術社会論、行政学。科学と社会、組織設計、研究戦略などの視点から研究や研究者、大学について研究。広島大学URAを経て2021年より現職。主な著作に「Public Values Theory: What is Missing?」（共著）、「国立大学法人化とは何だったのか：科学研究の観点からの評価」（共著）。

●小野 悠（おの はるか）

豊橋技術科学大学 准教授
テーマ：「暮らしやすい街をつくるために何ができるか」

2016年東京大学大学院博士課程修了。博士（工学）。課題解決型＝未来創造型まちづくりのための公・民・学連携のプラットフォーム「松山アーバンデザインセンター」や、豊橋駅前エリアの価値向上を民学官連携で目指す「豊橋まちなか会議」に都市工学の専門家として携わりながら、地域主体の自律的なまちづくりのあり方を研究・実践する。主な著書に「アジア・アフリカの都市コミュニティ」（共著）、「クロノデザイン」（共著）ほか。

●多湖 真琴（たご まこと）

株式会社メルカリ R4D Operations Manager
テーマ：「人文社会科学分野の研究への期待」

京都大学卒業後、開発職として富士通株式会社に勤務。2013年に弁理士資格を取得し、TMI総合法律事務所にて幅広い知財業務を担当。2018年、メルカリに入社後、知財チームの初期メンバーとして知財活動の立ち上げに従事。2019年よりR4D兼務。2020年より現職で、研究開発組織R4Dの企画運営を率いる。

①シンポジウム(2/15開催)

▶指摘されたポイント（話題提供）：

●水俣・福島の事例かせ見るならば、人々に変容をもたらすのは知識だけでなく、課題に向き合い続けている現場から生まれた「知恵」である。一方で知識と知恵の生産様式の違いにどう向き合うべきかも重要である。
●アカデミズムに対する「不信頼」の構造と悪循環があり、研鑽のための活力や余裕が生まれにくい業務環境にある。アカデミズムが研究室から社会へ開き、貢献することが重要である。
●アカデミズムの多様性の背後には、研究分野だけでなく、学問文化や価値観が存在かる。また、報酬、評価、認知などの個人的課題等、アカデミズムは一括りにはできず複雑な仕組みの上に成り立っている。アカデミズムを公共財として捉え、大学と社会の関係を「責任ある設計」にしていく必要がある。
●まちづくりの現場の経験から、アカデミズムと社会の交流が重要である。大学は地域と科学をつなぐプレイヤーになりうるが、アカデミズムと社会の時間の物差しの違いを理解することが重要。活動の評価に偏差がかかっている問題もある。
●民間の研究開発組織において、ELSIやコミュニケーション研究など、人文学・社会科学系の研究者と協働しているが、企業視点から見ると、学術的価値や有用性、連携効果が見えづらく、大学と積極的に連携するという発想に至りにくい。企業・大学それぞれから価値を積極的に発信していく必要性がある。

①シンポジウム(2/15開催)

▶指摘されたポイント（パネルディスカッション）：

●研究者の実務的諸活動が説明できない/共有しにくい
●専門知を実践に活用しても論文などの業績に反映しにくい
●アカデミア以外のフィールドにおける研究者の振る舞い方が重要
●研究者評価において、地域活動がうまく評価されにくいことが、社会的責任を果たしにくくしている
●多角的に評価されるはずの研究者が一元的な尺度で評価されている
●大学、大学人が社会から信頼を獲得するために何が必要か
●企業倫理などの策定において、プロセスや手続きを公開することで納得感を形成することが重要
●評価基準や評価方法における透明性の担保が必要
●当事者の要望が考慮されない評価制度の設計手法、任期付き雇用の増加と評価の運用課題、諸外国の研究者雇用との比較などが検討されるべき
●公共の場における公正性の基準について、最もvulnerable(脆弱)なところに停滞する声が反映されているかという視点が必要
●声なき声を傾聴し、可視化するところに人文学・社会科学の役割がある
●アカデミアが地域に入ることによる影響を考えるべき
●地域と社会、大学を接続するロールモデルを作るべき
●社会との距離が近くなることから起こる問題として、意図せず何かの勢力に加担する可能性があり、研究者や大学に対する信頼の失墜につながる

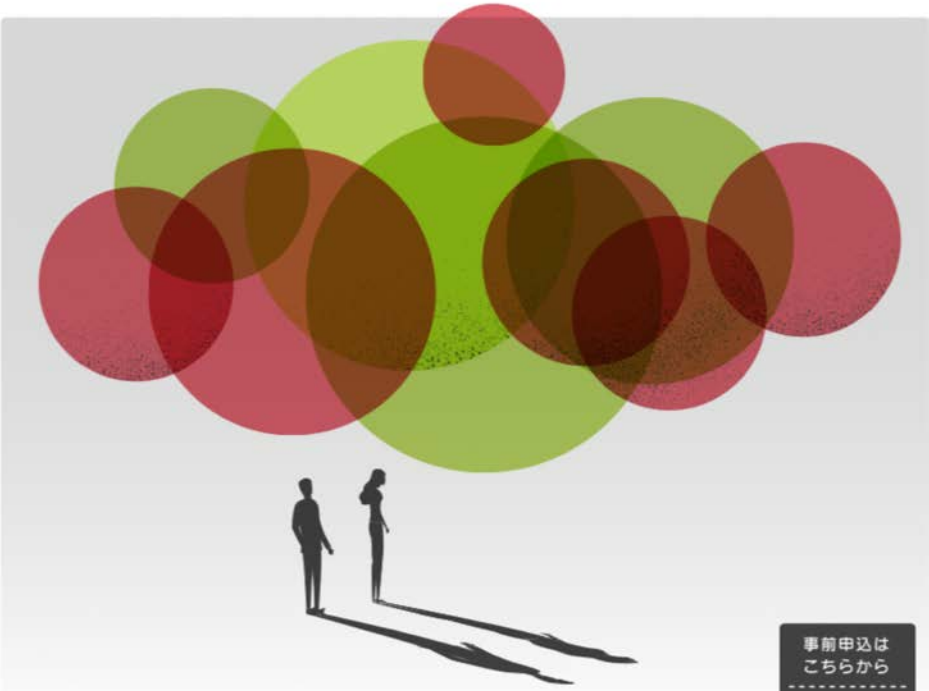
②WS07_政策と専門知(3/7開催)

文部科学省委託事業「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」

第7回 学術知共創プロジェクトワークショップ

～将来の人口動態を見据えた社会・人間の在り方～

テーマ代表者：大竹文雄 大阪大学大学院経済学研究科教授



政策と専門知 ― 市民・現場・対応 ―

2022.03.07Mon. 15:00-17:00

政策担当者は実務・政策の課題を常に抱えています。そこに専門家はどのように関わっていくことが望まれるのでしょうか。政策担当者の求めは、「今」「おおよその方向性」である一方で、専門家とりわけアカデミアの研究者は「時間をかけて」「厳密で正確な見解」を発出しています。これら社会と学問の乖離は大きな課題といえます。これらの解決には、社会と学問の架け橋となる人材開発や、非常時においてアカデミアの研究者が政策担当者と深く連携できる環境を整備することが重要です。今回は、「政策と専門知」の在り方について、前回のコロナ対策を再考する(WS04)を引き継ぐ形でアカデミアの研究者視点および政府からの情報を受け取る市民視点の話題を提供していただき、多様な専門家からの視点とともに深く考察していきたいと考えています。

●オンライン開催　●参加費：無料　●定員：参加(甲)：9名／参加(乙)：最大15名程度

※参加方法の詳細はホームページをご覧ください

事前申込はこちらから

▶ 公募期間 ◀
2022年2月18日
～3月2日

参加者用
or
クリック

視聴者用
or
クリック

社会ソリューションイニシアティブ (SSI) SOCIAL SOLUTION INITIATIVE

■主催｜社会ソリューションイニシアティブ(SSI)　ak-pj@ml.office.osaka-u.ac.jp

文部科学省委託事業「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」

第7回 学術知共創プロジェクトワークショップ

将来の人口動態を見据えた社会・人間の在り方

政策と専門知 ―市民・現場・対応―

政策と専門知をテーマに、アカデミアの研究者が非常時の政策課題に携わる革新的研究を積極的に創出するきっかけになるような活発な議論が展開されることを期待しています。

■テーマ代表者：大竹文雄 大阪大学感染症総合教育研究拠点 特任教授

1961年京都府生まれ。専門は行動経済学・労働経済学。大阪大学博士（経済学）。大阪大学助手、大阪府立大学講師、大阪大学社会経済研究所教授、同大学院経済学研究科教授等を経て、2021年から現職。政府の新型インフルエンザ等対策推進会議委員を2020年からの前身となる会議の構成員から務める。著書に『競争と公平感』『競争社会の歩き方』『経済学は役に立ちますか？』『行動経済学の使い方』など多数。

プログラム

15:00　WS案内
小出直史 大阪大学SSI 特任准教授

15:05　開会挨拶
堂目卓生 大阪大学SSI長／プロジェクトマネージャー

15:15　イントロダクション
大竹文雄 大阪大学感染症総合教育研究拠点特任教授

15:20　話題提供&全体討議　モデレーター：大竹文雄
話題提供①：仲田泰祐 東京大学大学院経済学研究科 准教授
「政策決定に活かされる「知」とは？」
話題提供②：磯野真穂 独立研究者
「リスクの実感とその醸造のプロセス―医療人類学の観点から」

16:55　閉会挨拶　大竹文雄

話題提供&全体討議｜話題提供者

仲田 泰祐　Taisuke Nakata
東京大学大学院経済学研究科 准教授

米連邦準備理事会（FRB）の主任エコノミストを務めた金融政策とマクロ経済のプロフェッショナル。2020年に日本に活動拠点を移した後、新型コロナの感染と経済影響に関する試算で注目を集める。1980年生まれ、2003年シカゴ大学経済学部卒業。カンザスシティ連銀調査部からキャリアを始め、12年にニューヨーク大博士（経済学）。「社会に役立つ分析」を掲げる実践派経済学者の代表選手。

●参考：https://sites.google.com/site/taisukenakata/
https://covid19outputjapan.github.io/JP/
https://twitter.com/NakataTaisuke

磯野 真穂　Maho Isono
独立研究者

人類学者。専門は文化人類学・医療人類学。博士（文学）。早稲田大学文化構想学部助教、国際医療福祉大学大学院准教授を経て2020年より独立。摂食障害、抗血栓療法、糖質制限、漢方医療といったテーマを中心に、リスクに対する身体感覚の醸造、情報と身体の関わりに着目したフィールドワークを続けてきた。著書に『なぜふつうに食べられないのか――拒食と過食の文化人類学』（春秋社）、『医療者が語る答えなき世界――「いのちの守り人」の人類学』（ちくま新書）、『ダイエット幻想――やせること、愛されること』（ちくまプリマー新書）、宮野真生子との共著に『急に具合が悪くなる』（晶文社）、『他者と生きる―リスク・病い・死をめぐる人類学』（集英社新書）などがある。

●オフィシャルサイト：https://www.mahoisono.com

人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト

社会ソリューションイニシアティブ (SSI) SOCIAL SOLUTION INITIATIVE

大阪大学 OSAKA UNIVERSITY

②WS07_政策と専門知(3/7開催)

速報版記事(WS07)：https://gakujututi.ssi.osaka-u.ac.jp/post/52.html

◆参加者リスト（敬称略）

氏名	所属	専門	メモ
大竹文雄	大阪大学	経済学	テーマ代表者 モデレーター
仲田泰祐	東京大学	経済学	話題提供者①
磯野真穂	独立研究者	医療人類学	話題提供者②
児玉聡	京都大学	哲学	参加者(甲)
錦織宏	名古屋大学	教育学	参加者(甲)
平田暁正	名古屋工業大学	理工系	参加者(甲)
菅原慎悦	関西大学	その他	参加者(甲)
大久保知美	沖縄科学技術大学院大学	該当なし	参加者(甲)
北村温美	大阪大学	その他	参加者(甲)

▶ワークショップの振り返り、チーム構築の相談、他のワークショップの案内等を通じて関係を維持

②WS07_政策と専門知(3/7開催)

●WS07：政策と専門知
記事：https://gakujututi.ssi.osaka-u.ac.jp/post/59.html

【概要】
冒頭、テーマ代表者の大阪大学感染症総合教育研究拠点 大竹文雄特任教授が、人文社会科学の専門知を政策立案に活かしていくことが求められている中で、「今」「おおよその方向性」を求める政策担当者と「精緻で正確な見解」を探究している研究者との間に存在する認識の乖離が深刻な課題であることを指摘しました。それらの課題に向き合うために、研究者と政策担当者との密な連携、市民が情報を正確に受け取ることができるような発信の仕方について考えるという、本ワークショップの主題を提起しました。
　続いて、2人のパネリストが話題提供を行いました。最初に、東京大学大学院経済学研究科 仲田泰祐准教授が「政策決定に活かされる『知』とは？」と題して、アメリカ中央銀行で政策分析・研究を行ってきた経験を踏まえ、アメリカの金融政策と日本のコロナ政策を比較しながら政策を支える専門知の在り方について問題を提起しました。もう一人のパネリストである文化人類学・医療人類学の研究者 磯野真穂氏は「リスクとその醸造のプロセス―医療人類学の視点から」と題して、カナダの原住民や医療機関における医師-患者間のコミュニケーションを例として、キーワードによるリスクの醸造について分析した結果を示しながら、専門家によるリスク提示の問題点を指摘しました。
　一つの話題提供が終わるごとに、大竹特任教授とパネリスト2人に6人の研究者・実務者が加わり、多角的な視点から活発な議論が行われました。その議論内容について、以下の4つの論点に整理しました。

【論点】
１）善き政策(行動)のために真の探究活動(専門知)がどのように関わることができるか
２）時間制限がある中で、異なる専門知間の見解をつなげて、ひとつまたは複数の提案にする方法をどう確立していくか
３）政策担当者が学術に求める「期待」に向き合うための専門家の基本的姿勢をどう考えていくか
４）専門知を制作に活かすために、現在の日本の構造的な問題にどう働きかけていくのか

③WS08_VULNERABILITY(3/17開催)

文部科学省委託事業「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」

第8回 学術知共創プロジェクトワークショップ

～新たな人類社会を形成する価値の創造～

テーマ代表者：出口康夫 京都大学大学院文学研究科教授

人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト　大阪大学 OSAKA UNIVERSITY

VULNERABILITY

ー AI・ロボット・サイボーグと“ひと” ー

2022.03.17Thu. 15:00-17:00

AIをはじめとする科学技術の加速度的発展は、映画や漫画で描かれてきた、ロボットやサイボーグと“ひと”が共存・共生する社会の実現をすぐそこまで手繰り寄せています。AI・ロボット・サイボーグと共存・共生するが社会では、“ひと”がもつVulnerability（傷つきやすさ、可傷性）は解消されうるのか？それとも共存・共生が新たなVulnerability（傷つきやすさ、可傷性）を生んでしまうのか？また、“ひと”は、傷ついた際に、その瞬間に伴う「痛み」に加え、「生々しい（身体的・心理的）傷跡」を残す点など、一旦失われた機能・構造が修復されたとしても完全に元に戻らない、取り返しのつかなさを備えています。このようなVulnerability をロボットやAIも備えるべきか、そもそも持つことは可能なのかといった論点を中心に徹底討論します。

●オンライン開催　●参加費：無料　●定員：参加（甲）：9名／参加（乙）：最大15名程度

※参加方法の詳細はホームページをご覧ください

事前申込はこちらから

▶ 公募期間 ◀
2022年2月18日～3月11日

参加者用 or クリック

視聴者用 or クリック

社会ソリューションイニシアティブ（SSI） SOCIAL SOLUTION INITIATIVE　■主催｜社会ソリューションイニシアティブ（SSI）　ak-pj@mi.office.osaka-u.ac.jp

---

文部科学省委託事業「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」

第8回 学術知共創プロジェクトワークショップ

新たな人類社会を形成する価値の創造

VULNERABILITY

ーAI・ロボット・サイボーグと“ひと”ー

Vulnerabilityをテーマに、AI・ロボット・サイボーグと“ひと”が相補的な関係を築けるのか？
そして違いをどう捉えていくかについて、先端技術者と人文学者・社会学者の視点を交差させて徹底討論します。

■テーマ代表者：出口康夫 京都大学大学院文学研究科 教授

専攻は哲学。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。現在、同大学院哲学専修教授・京都大学副プロボスト。数理哲学に加え、新領域である分析アジア哲学を研究。近著にWhat Can't Be Said: Contradiction and Paradox in East Asian Thoughts (Oxford University Press, 2021)がある。京都大学人社未来形発信ユニット長としてオンライン講義シリーズ「立ち止まって、考える」を主導すると共に、NTTや日立製作所との産学連携も行っている。

話題提供&全体討議｜話題提供者

田口 茂 Shigeru Taguchi
北海道大学人間知×脳×AI研究教育センター長

ヴッパータール大学（ドイツ）大学院哲学科博士課程修了。哲学博士（Dr.phil.）。北海道大学大学院文学研究院教授。専門は哲学、特に現象学。近年は数学者・神経科学者・ロボット工学者らと「意識」や「自己」をめぐる学際的共同研究を行っている。CHAINでは大学院生向けの文理融合的教育プログラムも展開している。主著Das Problem des 'Ur-Ich' bei Edmund Husserl (Springer, 2006)、「（現実）とは何か――数学・哲学から始まる世界像の転換」（西郷甲矢人氏との共著、筑摩書房、2019）他。

田崎 有城 Yuki Tazaki
株式会社KANDO 代表取締役

ディープテックスタートアップと並走しながらファイナンス視点も含めた総合的なハンズオン支援を行うクリエイティブファームKANDO代表。リアルテックファンドメンバーとしても多数のテックベンチャーを支援する。実績としてサイボーグベンチャー「MELTIN」では、国内外でのモメンタム作りに貢献し、シリーズBにおいて20.2億円調達。パーソナルモビリティ「WHILL」MaaS事業CES展示、HRテック「ZENKIGEN」事業コンセプトリードなど。2021年に先端研究者のロングインタビューメディア「esse-sense｜エッセンス」共同創業。同年、気候変動に対応する海上建築スタートアップ「N-ARK｜ナーク」創業。

プログラム

15:00 WS案内
小出喜史 大阪大学SSI 特任准教授

15:05 開会挨拶
堂目卓生 大阪大学SSI長／プロジェクトマネージャー

15:15 イントロダクション
出口康夫 京都大学大学院文学研究科 教授

15:25 話題提供＆全体討議

モデレーター
井野瀬久美惠 甲南大学文学部 教授

話題提供①
田口茂 北海道大学人間知×脳×AI研究教育センター長
「生命の不安定性と生命的コミュニケーション」

話題提供②
田崎有城 株式会社KANDO 代表取締役
「後日発表」

16:55 閉会挨拶
出口康夫

話題提供&全体討議 モデレーター

井野瀬 久美惠 Kumie Inose
甲南大学文学部教授

京都大学大学院文学研究科（西洋史学専攻）博士課程単位取得退学。博士（文学）。専門はイギリス近現代史・大英帝国史。『植民地経験のゆくえ――アリス・グリーンのサロンと世紀転換期の大英帝国』（人文書院、2004）で女性史青山なを賞を受賞。『子どもたちの大英帝国』（中公新書、1992）、『大英帝国という経験』（講談社、2007；講談社学術文庫、2017）など著書多数。

文部科学省委託事業 人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト　社会ソリューションイニシアティブ（SSI） SOCIAL SOLUTION INITIATIVE　大阪大学 OSAKA UNIVERSITY

③WS08_VULNERABILITY(3/17開催)

速報版記事(WS08)：https://gakujututi.ssi.osaka-u.ac.jp/post/53.html

◆参加者リスト（敬称略）

氏名	所属	専門	メモ
出口康夫	京都大学	哲学	テーマ代表者
井野瀬久美恵	甲南大学	歴史学	モデレーター
田口茂	北海道大学	哲学	話題提供者
田崎有城	株式会社 KANDO	その他	話題提供者
稲谷龍彦	京都大学	法学	参加者(甲)
加藤猛	日立京大ラボ	理工系	参加者(甲)
力石武信	令和工藝合同会社	芸術学	参加者(甲)
立花浩司	公立はこだて未来大学	その他	参加者(甲)
立花達也	大阪大学	哲学	参加者(甲)

▶ワークショップの振り返り、チーム構築の相談、他のワークショップの案内等を通じて関係を維持

③WS08_VULNERABILITY(3/17開催)

●WS08：VULNERABILITY
記事：https://gakujututi.ssi.osaka-u.ac.jp/post/59.html

【概要】
冒頭、テーマ代表者の京都大学大学院文学研究科 出口康夫教授が、本シンポジウムのテーマである「Vulnerability」について「傷つきやすさ・可傷性」という一般的な訳語とともに、それを超えた多様な意味を持つ概念であること、近年、多くの領域にまたがって使われる思潮のキーワードとなっていることを紹介しました。そのうえで、”ひと”に普遍的に備わっている「実存的Vulnerability」と、ある特定の集団だけが背負わされている「社会的Vulnerability」の*内実*やそれらの*間の*関係性や、ロボットやAIが”ひと”と同じようにVulnerabilityを備えるべきなのか、そもそも備えることができるのか、といった問いから、”ひと”はロボット・AIとどのような関係を築いていけるのかについて改めて考え直す契機になるのではないか、など、様々な問いを投げかけました。
　続いて、2人のパネリストが話題提供を行いました。最初に、北海道大学人間知×脳×AI研究教育センター長・田口茂教授が「生命の不安定性と生命的コミュニケーション」と題して、“ひと”と真にコミュニケーションができるパートナーとしてのAI・ロボットなどの人工主体が備えるべき条件として、本質的な傷つきやすさ・不安定さが含まれているべきではないかという課題を提示しました。もう一人のパネリストである株式会社KANDO・田崎有城代表取締役は、先端技術の社会実装やスタートアップ企業の支援に関わる立場から、ロボットやAIなどの先端技術の社会実装における人文学・社会科学の役割、AIを活用して定性価値を定量価値に変換する動きなどについて、具体的な事例を交えて実践知を紹介しました。
　その後、モデレーターに甲南大学・井野瀬久美惠教授を迎えて、出口教授とパネリスト2人に5人の研究者・実務者を交えた計９名による全体討議が行われました。その議論の内容を、以下の４つの論点に整理しました。

【論点】
１）AI・ロボットなどの異質な存在をどのように位置付けるか
２）「ひと」が持つVulnerabilityの本質な何か。それをAIやロボットなど人工物で解消できるか
３）技術の発展過程において、学術間のコミュニケーションをどのように醸成していくか

④WS09_平和へのアプローチ(3/22開催)

文部科学省委託事業「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」

第9回 学術知共創プロジェクトワークショップ

～分断社会の超克～

テーマ代表者：稲場圭信 大阪大学大学院人間科学研究科教授

人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト　大阪大学 OSAKA UNIVERSITY

平和へのアプローチ

― 学問と実践の共創 ―

2022.03.22 Tue. 13:00-16:00

社会における分断は、当事者・周囲・コミュニティ・国家などが無秩序な関係性の上で複雑化して存在しています。それらには文化や宗教、経済的構造も深く関与し、課題解決を困難にしています。そうした分断の構造を乗り越えていくために、学問にはどのような貢献ができるのか？何を探究していくべきなのか？このような問題意識から、今回のワークショップでは、「平和へのアプローチ」というテーマで、海外における紛争や難民などの課題を例に、実践と共創できる知的挑戦について議論します。

●オンライン開催　●参加費：無料　●定員：参加（甲）：9名／参加（乙）：最大15名程度

※参加方法の詳細はホームページをご覧ください

事前申込はこちらから

▶ 公募期間 ◀
2022年2月25日～3月17日

参加者用 or クリック

視聴者用 or クリック

社会ソリューションイニシアティブ (SSI) SOCIAL SOLUTION INITIATIVE

■主催｜社会ソリューションイニシアティブ(SSI)　ak-pj@ml.office.osaka-u.ac.jp

文部科学省委託事業「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」

第9回 学術知共創プロジェクトワークショップ

分断社会の超克
平和へのアプローチ ―学問と実践の共創―

社会における様々な分断を乗り越えていくために人文学・社会科学がいかに貢献できるのか、「平和へのアプローチ」というテーマのもと、海外における紛争や難民などの課題を例に、徹底討論します。

■テーマ代表者：稲場圭信 大阪大学大学院人間科学研究科 教授

1969年生まれ。専門は、共生学、宗教社会学。主な研究テーマは、防災・災害時協力と宗教、利他主義・市民社会論、ソーシャル・キャピタルとしての宗教、宗教の社会貢献。大阪大学「社会ソリューションイニシアティブ（SSI）」兼任、基幹プロジェクト「地域資源とITによる減災・見守りシステムの構築」研究代表。学校、公民館、寺、神社、自治会といった「地域資源」と「科学技術」のコラボレーションによる新たな減災・見守りシステムの構築に取り組む。

プログラム

13:00　WS案内　小出直史 大阪大学SSI 特任准教授
13:05　開会挨拶　堂目卓生 大阪大学SSI長／プロジェクトマネージャー
13:15　イントロダクション　稲場圭信 大阪大学大学院人間科学研究科 教授
13:25　話題提供＆全体討議

モデレーター
片柳真理 広島大学大学院人間社会科学研究科 教授
桑島秀樹 広島大学大学院人間社会科学研究科 教授

話題提供①　吉田修 広島大学大学院人間社会科学研究科 教授
「「与える」から「学ぶ」へ：研究者が関わるミンダナオの平和構築」

話題提供②　奥本京子 大阪女学院大学国際・英語学部 教授
「平和紛争学における芸術アプローチ：東北アジアでの実践から」

話題提供③　米川正子 明治学院大学国際平和研究所 研究員
NPO法人RITA-Congo 共同代表
「下の視点から平和を考える：難民、国連PKO、グローバル社会」

14:55　閉会挨拶　稲場圭信

話題提供＆全体討議｜モデレーター

片柳 真理 Mari Katayanagi
広島大学学術院 教授
大学院人間社会科学研究科国際平和共生プログラム プログラム長
広島大学平和センター 副センター長

在ボスニア・ヘルツェゴビナ日本大使館一等書記官、ボスニア・ヘルツェゴビナ上級代表事務所政治顧問、JICA研究所主任研究員等を経て2014年4月広島大学大学院国際協力研究科准教授就任。2015年4月同教授。国際法を基礎に平和構築を研究テーマとし、現在はビジネスを通じた平和構築、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争中の教育などを研究している。著書に単著Human Rights Functions of United Nations Peacekeeping Operations (Martinus Nijhoff Publishers)、近刊の共著「平和構築と個人の権利－救済の国際法試論」(広島大学出版会)など。

桑島 秀樹 Hideki Kuwajima
広島大学大学院人間社会科学研究科 教授
人間総合科学プログラム 副プログラム長

1970年生まれ。専門は、美学・芸術学・感性文化論。18世紀のイギリス思想史・芸術史研究を基礎に、趣味と共同体、風景と歴史、崇高と生の問題をあつかう。アイルランド的感性文化の核心に「メタモルフォーシス」や「インターフェイス」を認め、現代文明の批判や生きる技法への応用を考えている。2011-12年アイルランド共和国 Trinity College, Dublin（歴史学）客員研究員。主著に、『崇高の美学』（講談社）、『生と死のケルト美学』（法政大学出版局）、『司馬遼太郎 旅する感性』（世界思想社）など。

話題提供＆全体討議｜話題提供者

吉田 修 Osamu Yoshida
広島大学大学院人間社会科学研究科 教授

南アジアを主たるフィールドとしつつ、発展途上国から見た国際政治、発展途上国の政治などを研究している。特に、インドと米国との関係を見ていく中で、国際社会が1950年代末から1960年代にかけて「発展途上国」というカテゴリーを「発見」していく過程に関心をもつようになる。また、「遅んだ国が遅れた国に与える」というニュアンスを持つ「開発援助」に疑問を持っていたこともあって、広島県やJICA等と連携して行う研究活動を通じて考察を深めたフィリピンのミンダナオ紛争の平和構築過程にJICA草の根技術協力事業によって研修プログラムを作成、2013年から6年間、「学び合いながらともに作り出す自治政府」を目指して広島県とともに取り組んだが、いまだに模索中。

奥本 京子 Kyoko Okumoto
大阪女学院大学国際・英語学部 教授

専門領域は、平和紛争学、紛争転換学、ファシリテーション研究など。特に、東北アジアにおける平和創造を、平和ワークにおける芸術アプローチを通じて模索している。また、アジアそして他地域におけるネットワークを深化させることにも注力する。ワークショップの手法により如何に関係性を深化させることが可能かの追求や、市民社会・NGOによる平和活動を実践している。主な著書に、『平和ワークにおける芸術アプローチの可能性』、『平和創造のための新たな平和教育』（共編著）、『国際共生と広義の安全保障』（共著）、訳書に、『ガルトゥング紛争解決学入門』（共監訳）など。

米川 正子 Masako Yonekawa
明治学院大学国際平和研究所 研究員
NPO法人RITA-Congo 共同代表

南アフリカ・ケープタウン大学大学院で修士号取得（国際関係）。専門は難民、紛争と平和、人道支援（特にコンゴ民主共和国とルワンダ）。国連ボランティアとしてカンボジア、リベリア、タンザニアなどで活動。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）職員として、ルワンダ、コンゴ、ジュネーブなどで勤務。宇都宮大学、立教大学、筑波学院大学で教鞭をとった後、現在、明治学院大学国際平和研究所研究員、NPO法人RITA-Congo共同代表。主著に『あやつられる難民－政府、国連、NGOのはざまで』（ちくま新書、2017年）、『世界最悪の紛争「コンゴ」～平和以外に何でもある国』（創成社、2010年）、Post-Genocide Rwandan Refugees. Why They Refuse to Return 'Home': Myths and Realities (Springer, 2020)。

文部科学省委託事業 人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト

社会ソリューションイニシアティブ (SSI) SOCIAL SOLUTION INITIATIVE

④WS09_平和へのアプローチ(3/22開催)

速報版記事(WS09)：https://gakujututi.ssi.osaka-u.ac.jp/post/54.html

◆参加者リスト（敬称略）

氏名	所属	専門	メモ
稲場圭信	大阪大学	社会学	テーマ代表者
片柳真理	広島大学	法学	モデレーター
桑島秀樹	広島大学	美学・芸術学・思想史	モデレーター
吉田修	広島大学	国際政治学	話題提供者
奥本京子	大阪女学院大学	平和学	話題提供者
米川正子	明治学院大学 NPO 法人 RITA-Congo	国際関係学	話題提供者
熊谷智博	法政大学	心理学	参加者(甲)
佐伯奈津子	名古屋学院大学	その他	参加者(甲)
眞嶋俊造	東京工業大学	哲学	参加者(甲)
小野木康雄	株式会社文化時報社	該当なし	参加者(甲)
志賀裕朗	JICA 研究所	政治学	参加者(甲)
隈元美穂子	国連訓練調査研究所	経済学	参加者(甲)

▶ワークショップの振り返り、チーム構築の相談、他のワークショップの案内等を通じて関係を維持

④WS09_平和へのアプローチ(3/22開催)

●WS09：平和へのアプローチ
記事：https://gakujututi.ssi.osaka-u.ac.jp/post/61.html

【概要】

冒頭、テーマ代表者の大阪大学大学院人間科学研究科の稲場圭信教授から、社会における分断は、多様な要素が無秩序かつ複雑に絡み合うことで存在し、文化や宗教、経済構造など多くの要因がそれぞれ深く関与していることが課題解決を非常に困難にしていると指摘しました。そして、社会における分断の構造を乗り越えるために学問と実践の共創を一歩一歩進めていく重要性に言及しました。その上で、海外における紛争地が抱える状況や難民問題など具体的な事例を取り上げ、平和へのアプローチにおける実践と共創する学術の可能性を徹底的に議論したいと、本ワークショップの趣旨を語りました。

続いて、パネリストによる話題提供とそれをベースにしたセッションが3回行われました。最初の話題提供では、広島大学大学院人間社会科学研究科の吉田修教授が「『与える』から『学ぶ』へ：研究者が関わるミンダナオの平和構築」と題して、紛争後の和平プロセスの中で樹立された自治政府の行政能力開発を支援する取り組みの経験から、日本の行政活動の中で培われた理論や概念を平和構築に活かすことができる可能性を示しました。2回目は、大阪女学院大学国際・英語学部の奥本京子教授が、「平和紛争学における芸術アプローチ：東アジアの実践から」と題して、暴力と平和の間にあるコンフリクトを可視化・顕在化させ、平和の形へとトランスフォームさせていく方法を提示し、その実践として行っている演劇や語りなどアートを通じた平和教育プログラムを紹介しました。

最後は、明治学院大学国際平和研究所の米川正子研究員が、「下の視点から平和を考える：難民、国連PKO(平和維持軍)、グローバル社会」と題して、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)の職員としての経験を述べながら、難民の発生には平和構築・国家建設の副作用という側面があるのではないか、PKOは本当に平和維持や平和構築に役立っているのか、といった問いを投げかけ、グローバル社会が紛争の加害者になり得る危険性を指摘しました。

各セッションは、広島大学学術院の片柳真理教授、広島大学大学院人間社会科学研究科の桑島秀樹教授をモデレーターに、稲場教授とパネリストの他、多様な分野の研究者・実務者を交えて計12名で活発に行われ、熱のこもった議論が展開されました。それら議論の内容を、以下の４つの論点にしたがって整理しています。

【論点】

１）人類が自分たちすべてを殺戮する軍事力を持ってしまった中、「平和」をどのように構築していくのか
２）個別性の高い専門知・経験知を、いかに平場に出し合い・活かし合う相互補完的なコミュニティを築いていけるか
３）補完行政や難民支援等の個別的・具体的な取り組みに対して、学術はどのように応えることができるのか
４）「平和」や「紛争」という意味の多義性を持つ言葉を解きほぐしつつ、世界を平和に導く仲保者的な役割をどのように果たすことができるか

⑤WS10(5/16収録)

動画公開(WS10)：https://gakujututi.ssi.osaka-u.ac.jp/post/58.html

いのちを大切にする社会を目指して―学術知と大学の役割

⑤WS10(5/16収録)

動画公開(WS10)：https://gakujututi.ssi.osaka-u.ac.jp/post/58.html

いのちを大切にする社会を目指して―学術知と大学の役割

【趣旨】

様々な課題を抱える日本や世界の状況を踏まえ、本事業が掲げる「いのちを大切にする社会」に向けて、いのちの「脆弱さ」（vulnerability）を意識した「新しい価値」はどのようなものか、また、そのような価値を基礎とするオープンなコミュニティを形成する上で超克すべき分断は何か、さらには、そのためのコミュニケーションの在り方を探る。そのうえで、学術知（特に人文学、社会科学の知）および大学が、これらの課題にどう応え得るかを議論する。

【論点】

1. いのちの「脆弱さ」(vulnerability)を基礎に置いた新しい価値はどのようなものか
   - Capabilityに価値を置く近代社会の限界
   - AIやロボットと比較した時の人間のvulnerabilityが持つ意味
   - 「社会的弱者」(socially vulnerable)への眼差し
   - 学術知および大学が果たしうる役割
2. オープンなコミュニティを形成する上で超克すべき分断は何か
   - 分断をもたらす心理、あるいは社会構造
   - 私と他者の分断を乗り越えるためには何が必要か
   - 科学と文化の分断、専門知の格差などをどう乗り越えるか
   - 学術知および大学が果たしうる役割
3. 分断を乗りこえるためのコミュニケーションはどうあるべきか
   - 専門家と政策担当者、市民の間のコミュニケーションをどうとるか
   - 専門知が政策に活かされにくい日本の社会構造のどこに問題があるか
   - 学術知および大学が果たしうる役割

今後の課題

▶ワークショップ WS11～13（8月以降）
・過去に出された論点(主にWS10) を踏まえ、大きなテーマごとに1回ずつ実施する
・ワークショップ後にサロン等を通じて論点を深め、研究チームの構築につなげる

▶シンポジウム（12月以降）
・2年半の事業を総括し、社会に発信する

▶言語化
・13回のワークショップ（特にWS10）で出された論点を参考に、目指すべき価値や社会、それらを実現するためのコミュニケーションや政策の在り方について論じるとともに、学術や大学が果たすべき役割を言語化する

▶ネットワークの構築と拡大
・事業終了後も、これまで協力・支援していただいた組織や個人を中心に「共創の場」を持ち続け、ネットワークを構築し拡げる